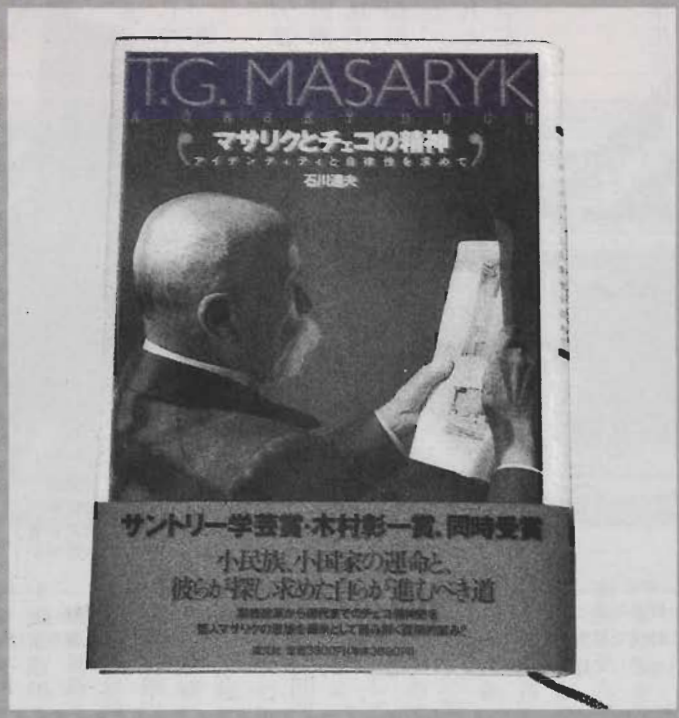
総合科学部石川達夫著

『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』が

「サントリー学芸賞」及び「木村彰一賞」をダブル受賞

「サントリー学芸賞」と「木村彰一賞」



本学総合科学部石川達夫助教授は、本年度（一九九五年）の「サントリー学芸賞」を受けられ、併せて「木村彰一賞」も受けられました。

サントリー学芸賞は、わが国で社会と文化に関する独創的で優れた研究・評論活動をされた方に毎年贈られるもので、石川先生の著書『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』が歴史的な研鑽と現代的な意義とを兼備した卓越した業績として、その〈思想・歴史部門〉において、高く評価されました。

木村彰一賞は、世界的なスラヴ学者であった故木村彰一東大教授を記念して、スラヴ研究において優れた業績を上げた者に毎年贈られるもので、先生の今回の受賞作を中心としたチェコ精神文化史の総合的研究が高く評価されました。

マサリクとチェコの精神

今回の受賞の対象となった『マサリクとチェコの精神』は、哲人政治家マサリクの思想について、土壌となったチェコ史を踏まえつつ論究したものであるが、マサリクを軸に〝チェコ精神史〟を読み解く試みともなっている。

群盲政治家によって操られている現在の我々を見るとき、政治家のあるべき姿と民族のあるべき姿を考える絶好の著書となっている。

トマーシュ・ガリグ・マサリク（一八五〇～一九三七）は、英国の哲学者カール・ポパーをして「おそらくかつて存在した最良かつ最高の民主主義国家」と言わしめた、チェコスロヴァキア第一次共和国の独立運動の指導者であり、初代大統領でもある。

当時チェコは、オーストリア・ハンガリー帝国（ハプスブルグ家）の支配下にあり、民族滅亡（ゲルマン同化）の危機を経て、民族復興運動を展開していた。本来大学教授（哲学・社会学）であったマサリクは、チェコの精神伝統の中から引き出した「人間性」と「民主主義」の理念を掲げて、チェコ人の精神的指導者となった。

特に興味深いのは、マサリクがチェコの民族主義の排外主義的な側面を痛烈に「自己批判」して、「民族性」と「世界性」・「人間性」を調和的に統合したことであり、この点に今日の民族問題を考える上での大きな示唆がある。

本書の魅力

特に本書の魅力は、チェコの宗教改革者ヤン・フスや教育学者コメンスキー（コメニウス）などからマサリクを経て現チェコ大統領ハヴェルに到るまでの劇的なチェコ精神史の流れを、塚本哲也氏が「スメタナの『我が祖国』やドヴォルザークの『新世界』のように感動的だ」と評しているように（『日本経済新聞』）、非常にいきいきと描き出している点である。

（広報委員　安藤正昭　記）

『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』
三八〇〇円（成文社）

プロフィール

（いしかわ・たつお）
◇一九五六年生まれ
◇一九八八年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了
◇一九九一年から現職
◇専攻＝ロシアとチェコの文学・思想